

平成29年度第1回医療・介護多職種連携会議GWまとめ①
多職種の立場から地域の方に「最期をどう生きるか」考えて
いただくために必要なこと 検討案

本人・家族への支援

- ・身近な人の死から、まずは家族で話が出来るといいな
- ・家で出来る医療の知識を伝える
- ・家族の方の思いも受け止め援助する
- ・看取りの場は病院だけではない事を伝えていく
- ・良い最期を迎えるためには、家族の力、協力が必要である事を伝える
- ・医療機関において、まず身体面の現実を受容していただく
- 病院が出来る支援
 - ・予後を説明した後のフォローが必要
 - ・病院入院中の場合は患者様の異常の早期発見につとめ、家族の状態の悪化を伝え、最後は家族に見守られて永眠するのがベストだと思う
 - ・どんな支援を受けられるのか、絵などで説明があれば選択することも出来るのでは？
 - ・病院の受けいれ体制を整えておく
 - ・いつでも受け止めるからお家に帰ろう！（後方支援）

地域への働きかけ

- ・近隣の方々との関係を絶っている方の支援は？
- ・地域の方の助けで孤独死をなくす
- ・地域住民を対象にした講演の場を作る（人生の最期をどう生きるか）
- ・公民館などで話し合う場を持つ（医療者から情報提供）
- ・健康教室などを行い、住民の方に参加して頂く
- ・死をマイナスに捉えないような学びの場を作る

情報収集

- ・デイサービス等で本人、ご家族から元氣なうちから聞き取れる情報は集めておく
- ・訪問時に今困っていることだけでなく、将来の話をする

多職種の連携・知識の向上・共有

- ・医療、介護関係者が看取りについての知識を持つ、共通の認識で対応する。どこどこの地域だと往診が難しい。どこどこに訪問系サービスがある等地域の現状についても把握しておく
- ・医療者自身が終末期についての知識を向上する

自分がしておくこと

- ・自分の意思がはっきりしているうちに身近な人と話してみる
- ・まずは自分がどうしてほしいか考える
- ・エンディングノートをつくる
- ・お葬式をどうしたいか考える
- ・一年に一回自分の誕生日に考えてみよう
- ・誰に看取ってもらいたいのか？
- ・自分がいなくなった時だれが困るだろう？

している事

- ・職場での看取りについての経験のDVDを作成し、ご利用者の家族にみて頂いている
- ・施設やショート、デイサービス利用開始時に必ず延命や看取りの希望を聞いている
- ・老健入所時アンケートを実施しているが一つのきっかけにはなっているかも？

要望

- ・家族の負担が減るよう安価なサービス、物品レンタルが欲しい
- ・若い人の手助けが出来ない。介護休業をもっととりやすく！

普及啓発をする

新見の現状を伝える

- ・どこでどういった支援を受けられるか、受けられないか伝える
- ・急死は頻発ではない、ピンピンコロリは少ないことを伝える
- ・往診できる医師が少ない

エンディングノートの活用

- ・人生の最期を考えるきっかけとして、エンディングノートを配布する
- ・エンディングノートを自宅で2世代でかく（家族でお互いに考える）

パンフレットの活用

- ・新見の施設一覧等も入った看取りブック？？？
- ・話をするきっかけとして、懸命に生きた人の情報があればいいかな？
- ・〇〇という状態になったらどうしますか？問いかけてみる（意識の中に最後のことを入れてもらう）
- ・最近考えたお気に入りフレーズ
 - 20歳 自分に責任を持つ
 - 40歳（2度目の20歳）家族に責任を持つ
 - 60歳（3度目の20歳）親のことも責任を持つ
 - 80歳（4度目の20歳）残される者への責任を持つ
- ・さだまさしの歌いいよねー防人の歌
- ・外来待ち時間にチラっとみれるパンフレットの活用

講演会の開催 事例の共有

- ・介護予防や認知症の講演に「人生の最期」を考える機会を持つ
- ・在宅死以外でも死ぬ瞬間を共有していく
- ・看取りをしたことのある人から話を聞く
- ・今までの最期の事例を知ってもらい、どう迎えたらいいか教えてもらう
- ・終活などの講演会等に「人生の最期」を考える機会をもつ。出来るだけ多くの人を誘って参加

勉強会

- ・どういう最期を迎えるのか。考える勉強会も必要
- ・遺言、相続などミニ講演会をする
- ・実際に直面した時どう関わるかの勉強会をする
- ・流行の終活？の考えの普及セミナーとか
- ・院内研修（入院家族向け）

子供たちへの教育

- ・子供たちへの教育、参観日に親と一緒に看取りの勉強をする
- ・子供たちに命の授業、きれいごとではなく「死」の授業など年齢に応じたもの
- ・子供のころからも「死」「命」を学べる機会を作る
- ・子供たちへ道徳の時間に教育する。

地元メディアの利用

- ・看取りについての番組を作り、地元テレビで放送。また、DVDを作成し、地域の集まり等で上映する

多職種の立場から地域の方に「最期をどう生きるか」考えていただくために出来ること

信頼関係を作る

医師がすること

- ・病気のことを隠さないで話していく
- ・診察のときにどういう最期があるか具体的に話をする
- ・医師から最期の生き方を考えておくことの大切さを伝えてもらう
- ・治療の状況について説明する(本人、家族)。伝えた後で理解度の確認を行う



医療・介護関係者の取組み

- ・本人のアセスメントをしっかりと、関係者間で共有する
- ・受診時に死生観をひろげて聞いてみる。(話を聞く時間を増やす)
- ・血圧手帳とともにれんらく帳をチェックする
- ・医療・介護れんらく帳の記入をすすめ、確認をする
- ・体調悪化時の対応等関係者間(本人、家族、病院、診療所、施設、介護事業所等)で調整を行っておく
- ・病院全体で取り組む。外来➡病棟へ情報提供
- ・終末期と限らず、入院となる患者様を対象に、最後にどうしたいかアンケートをとる

個人としてしておくこと

- ・自分を看取ってもらう人を見つけるしておく
- ・医師から病気について、納得できるまで話を聞く(医師もしっかり説明を)
- ・ぼんやりでもいいので延命治療や臓器提供をするか等、保険証の裏に書く



本人と家族の橋渡し

医療・介護れんらく帳を上手に使う

- ・対象を介護保険の方から全市民へ拡大。子供たちは道德の時間に、若い世代も特定検診の時とかに記入する
- ・福祉委員から広げてみる
- ・病院の受付や待合室に掲示
- ・受診時に医師にコメントを書いてもらう
- ・P23.24を医師に書いて貰う
- ・カラフルシールを作成。各施設に貼ってもらう、名前付き
- ・に一みんを入れる



居場所作り

- ・同じ疾患を持つ患者会等の紹介
- ・傾聴し、安心してすごしていただける環境づくり



情報共有大切

普及啓発をする

- ・備北民報でコーナーを作り、看取り経験を家族から話してもらう
- ・ケーブルテレビで看取りについて特集番組を作って、定期的に放送してもらう
- ・看取りに関する寸劇
- ・看取りをした人のエピソードをまとめた「新見看取りブック」を作成し配布する
- 医療・介護現場での具体例の紹介(いい例、困る例、きれいごとではないもの)
- ・利用可能なサービスや制度を案内。また、相談窓口を明確にし、具体的に情報提供をする
- ・各地域に出向いて、座談会など話しやすい場で見取りの講演をする
- ・見取りを体験した方の話や、こういった見取りがあったことなど伝える
- ・介護者のつどいなどで、話題にして茶のみ話の延長で話す
- ・エンディングノートの記入をすすめる

